



岡本正明、『暴力と適応の政治学——インドネシア民主化と地方政治の安定』京都大学学術出版会、2015、ix+293p.

1998 年、アジア通貨危機をへて 30 年以上におよんだスハルト政権が崩壊した。長期政権が消滅したあと、この国はどのように推移したのか。一時は大きな紛争が起り、各地でデモが頻発し、破綻国家になると懸念された。しかし現在では、民主化に成功し、「世界でもまれに見る成功した体制変革」(p.249)をなしとげた国と見なされている。ユドヨノ大統領は 10 年にわたって政権を維持し、G20 に参加する東南アジア唯一の国となったことがその証拠である。では、なぜ安定したのか。その安定の意味とはなにか。地方政治を詳しく追跡しながら実態を明らかにし、この問いに答えたのが岡本正明による本書である。

地方政治が問われなければならないのは、民主化の重要な柱が分権化であったためである。地方から中央へと富を収奪する強い中央集権的姿勢がスハルト体制への批判となり、政権崩壊後、分権化が国家存続のために必然的に要請された。1 章「権威主義体制の崩壊から民主化・分権化へ」は、分離主義ないしは連邦制への傾斜をかわしつつ、分権化が進められた過程を手際よく整理している。

本書の最大の目的は、地方政治において政治的安定がどのように達成されたのかを、地方の政治アクターへのインタビューをとおして掘り起こすことである。実際、本書は優れたフィールドワークの記録ともなっている。各章の冒頭に著者の体験が書き込まれており、「学術書として適切かどうかを問う声があるかもしれない」(p.269)と著者は控えめだが、地方政治の現状と最も重要なアクターである暴力集団の荒唐無稽で恐怖にみちた「人となり」を十分伝えている。

政治的安定について、「イデオロギー・宗教・エスニシティ・階級・地域間格差など社会的亀裂に基づく対立が物理的暴力の行使に発展せず、政治体制が安定していること」(p.6)と著者はまず定

義する。そのうえで、社会的亀裂の非政治化、非争点化をもたらす 3 つの力学に着目する。ひとつは、行政改革のなかで認可された「細分化の地域主義」と著者が呼ぶ自治体新設運動である。これによって、民族的あるいは経済的に二級化されていた人々が新しい州や県といった自治体を新設し、そのため社会的亀裂の表面化が抑制された。

次に、選挙制度改革と直接選挙の導入である。地方首長の直接選挙が始まり、しかも知事選であれば知事と副知事のように、正副首長候補の組み合わせによって選挙が争われる仕組みが導入された。それによって、多数の票をえるためには、地域に存在する社会的亀裂を架橋するようなバランスのとれた正副候補選が求められた。こうした組み合わせ候補が複数立候補することで社会的亀裂が非争点化し、紛争化せずに選挙が実施できたのである。同時に、直接選挙であるために露骨な暴力の行使が難しくなり、また新政党が独自の価値(例えば、イスラームの社会正義)を掲げて支持を広げる可能性が開けた。

最後に、「地域に応じた政党の合従連衡」である。全国政党が地方まで浸透している一方、地方における社会的亀裂は地域ごとに異なるあり方で複数に走っている。その結果、政党による中央への政治的上昇回路を残しつつ、地方においては正副候補を選ぶ過程で中央の政党関係とは別の政党の連合関係が起きた。そのなかで地方固有の妥協と調整がはかられ、社会的亀裂の争点化が回避されるのである。

この 3 つの力学の否定的側面も明らかになっている。選挙後、正候補が副候補を政治的に排除し、政治的役職と経済的利権を独占して新設された自治体を家産化し、一族による汚職が蔓延するという構図である。スハルト体制は倒れたが、分権化によって逆に「ミニ・スハルト」が地方に出現するのである。著者の意図は、しかしこうした否定的側面を批判することではない。視座はあくまで政治的安定であり、そこで分析対象となるのが本書のタイトルにある「適応」である。政治的アクターは制度改革に適応したために結果的に政治的安定がえられているのであり、その適応戦略がたとえそれがどのようなものであっても分析される

のである。

2章以後全10章のうち8章までは、植民地時代にまでさかのぼって地方政治の歴史的展開が時代順に整理されている。著者が選んだ地方は、首都ジャカルタの西に隣接するバンテン州である。地理的には首都に近く、政治的中心についてはインドネシア国家の政治に影響を受けるとともに与える求心的条件を持ちながら、社会的にはエスニック・アイデンティティを求める独立志向の強い遠心的条件を持ち、そのなかで暴力とイスラームというインドネシアの政治を分析するうえで欠かせない社会的要素が突出しているのである。実際この地域では、暴力の行使をためらわないジャワラと呼ばれる存在が「文化的・社会的に認知されてきた」(p.45)のであり、同時にウラマーと呼ばれる指導者がイスラーム寄宿舎を農村部に所有して展開し、両者が社会的リーダーとして「自立性をもって行動しやすかった」(p.51)。

2章「暴力集団(ジャワラ)とイスラーム——バンテン地方の政治構造の歴史的展開」では、植民地時代の研究を振り返り、実際にジャワラとウラマーが影のリーダーとなり、反乱や社会革命を主導したことを確認する。3章「独立宣言、社会革命、そしてアイデンティティの政治——1945-1971年」では、1945年日本軍政崩壊後、ジャワラとウラマーが国家から自立して行動し、社会革命、イスラーム国家を樹立しようとするダッラー・イスラーム運動、バンテン州設立運動が起こるが、いずれも未成立に終わった経緯が語られる。

1965年9月30日事件は、このようなジャワラとウラマーのあり方を根底的に変えた。共産主義者が大量に虐殺され、この恐怖のうえにスハルトは長期政権を樹立させた。適応の可能性と不可能性を著者が明確に書きわけているわけではないが、共産主義者という旧勢力の適応を完全に不可能にする暴力のうえにスハルト体制は成り立っているのである。その結果、4章「ウラマーとジャワラを通じたスハルト体制の浸透——1971-1998年」に描かれるように、ジャワラとウラマーが国家と地方の媒介項となってスハルト体制に取り込まれていく。従来からのウラマーは、政権から資金援助をうけて「宗教的権威を体制の正当化に捧げる」

(p.83)新しいウラマーと入れ替わり、政治的に無力化した。一方ジャワラは、ウラマー同様に国家への自立性を失うが、逆に国家と警察とともに治安を担当する組織の末端に取り込まれ、それによって自らの政治力を高め、地方の建築業界をしきる「スハルト体制の寵児」となっていくのである。

5章「細分化の地域主義——バンテン州設立運動」と6章「州[総督]と呼ばれる男——権力闘争とジャワラによる地方支配——2000-2006年」では、スハルト体制崩壊後バンテン人アイデンティティが再政治化され、バンテン州が設立された過程が描かれる。そのなかで寵児は消えるのではなく、逆に新州設立に重要な役割をはたし、そればかりか政治的役職と中央からの資金を独占し、州の家産化に成功したのであり、この適応戦略が詳しく分析される。分権化を民主化の象徴として歓迎した国内外の支援が、逆に「ジャワラにとっては非の打ち所のない政治体制」(p.147)を作ったという逆説を指摘することを著者は忘れてはいない。

7章「新勢力との闘争——バンテン州知事選、2006年」と8章「福祉正義党——イスラーム的正義の台頭と皮肉なアクロバット」は、政治制度の変化からこの寵児の地位が脅かされる局面を扱っている。2005年、地方首長に直接選挙が導入された。それによって一般市民が有権者となり、彼らを取り込んでイスラーム的社会正義の実現をめざす福祉正義党が台頭した。そのなかで2006年バンテン州知事選挙が実施され、寵児は自らの娘を州知事にすることに苦労して成功した。一方、州の地方選挙では、選挙での勝利を重視するあまり、福祉正義党は社会正義とは正反対のジャワラ勢力と連合したのであり、この適応の仕方を著者は「皮肉なアクロバット」と呼ぶのである。

9章「安定化のポリティクスの多様性——インドネシア地方政治の全体像」は、各地域における社会的亀裂の非政治化、非争点化を比較検討し、安定化作用がバンテン州にとどまらないことを示している。10章「暴力と適応の政治を超えて」では、知事となった寵児の娘が新たに結成された汚職撲滅委員会によって逮捕された経緯が最後に語

られ、そのうえで民主主義の質の向上に「希望はある」(p. 268)と著者は結んでいる。

2014年ジョコ・ウィドド大統領の誕生をはさんでスハルト体制崩壊後のインドネシアの政治社会を扱う著作の刊行が相次いだ。政府および国軍の高官へのインタビューをまじえて崩壊後の体制変化を詳述し、明確に整理した本名の著作が上からの研究であるとするれば、見市の著作は拡大する中間層に焦点をあて、分裂ではなくて『「地続き」の要素』を見いだしている[見市 2014: 198]。ここに地方政治を扱って言わば下からの研究といえる本書が加わった今、上、中、下から照らされた国家の全体像が浮かびあがった。このことは、移行期をへて政治的に安定した新たな国家が再形成された兆候といえる。

世界最大のイスラーム人口を抱える国家が権威主義的体制の崩壊後に政治的安定にたどりついたことを国際社会は民主化の勝利として歓迎した。しかし、その裏側では、暴力や汚職がはびこり、人権侵害も頻発している。民主化の指標のひとつである選挙は、金で動く人間がいるかぎり、暴力と汚職を再生産するという民主化の限界さえ指摘できる。しかし、本名が述べているように『「安定」と『問題の温存』は対立する展開ではなく、むしろコインの裏表』[本名 2013: 201]なのであり、旧体制の既得権益から肥え太った暴力勢力が政治体制の変化に適応しているからこそ、新しい体制が破壊されずに安定しているのである。体をはったフィールドワークからこの事実を地方政治のレベルで明らかにした本書の意義は大きい。

(永瀬康之・名古屋工業大学大学院)

参考文献

- 本名 純. 2013. 『民主化のパラドックス——インドネシアにみるアジア政治の深層』東京：岩波書店。
見市 建. 2014. 『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』東京：NTT出版。

森下明子. 『天然資源をめぐる政治と暴力——現代インドネシアの地方政治』京都大学学術出版会, 2015, 234p.

天然資源を豊富に産出する地域において、資源をめぐる利権争いが存在しても、それが暴力的紛争に発展する場合とそうならない場合があるのはなぜか。本書はこの魅力的な問いに答えるため、天然資源が豊富なインドネシアのカリマンタンに位置する三州、東カリマンタン、西カリマンタン、中カリマンタンを比較分析したものである。著者によれば、東カリマンタンでは天然資源に関わる暴力的紛争は起きていないが、西カリマンタンと中カリマンタンではそれぞれ1990年代と2000年代に、地元民ダヤック人とマドゥラ人移民との民族紛争を経験している。

著者の議論を要約すれば、以下のようなものである。西・中カリマンタンでは、確かにダヤック人とマドゥラ人との紛争が起きた。しかしこれらの紛争は、スハルト体制下で周縁化され不満を募らせたダヤック人が、より多くの行政ポストを獲得するために暴力に訴えたものである。従って、実はこれらの紛争は天然資源とは関係がない。では、なぜこの両州では天然資源が暴力に結びつかなかったのか。

この問いに対し、著者は天然資源をめぐる利権構造に着目する必要があると述べる。すなわち、西・中カリマンタン両州で天然資源の開発に関与している人々が、スハルトを頂点とする利権分配ネットワークに取り込まれ、多少とも恩恵に与っているために、ダヤック人を支援する勢力が現れなかった。それゆえに西・中カリマンタン両州では天然資源が暴力に結びつかなかった。つまり、資源をめぐる利権構造の違いが政治構造の違いを生み、この違いが、暴力が政治の手段として使われるか否かを決める。これが本書の議論の核心である。では、三つの州の事例に沿って、さらに著者の議論を紹介していこう。

第一に東カリマンタン州では、スハルト時代に中央政財界に庇護者を得たエリートが、地方分権化後も影響力を維持した。中央の政治経済エリートは、石油・天然ガス、石炭の開発に関わる権益

を守るために、スハルト時代から関係を築いてきた州エリートを地方首長に据えることに利益を見いだした。しかしこれは、同州のエリートが中央政財界とのパトロン・クライアント関係に依存することを意味する。もし中央で政界再編が起きれば、東カリマンタンのエリートも後ろ盾を失うこととなる。換言すれば、たとえある候補が首長選で敗れたとしても、中央レベルでの政界再編を待てば自分にチャンスが回ってくるかもしれない。そのような期待をできるがゆえに、東カリマンタンでは、暴力的手段に訴えてまで地方首長の座を奪おうとする動きがないのだという。

次に、中カリマンタン州では、スハルト体制期には木材産業が盛んであり、違法伐採や密輸にも手を染める地元の有力実業家が登場した。彼らは2000年以降、アブラヤシ・プランテーションや石炭事業にも進出し、さらなる富と影響力を蓄えている。このような実業家が、地方分権化後の首長選において特定の候補に選挙資金を提供し、その候補が当選すれば、自らの天然資源ビジネスに有利な政策を実施させるという構図になっている。そのなかで地元民ダヤック人は、開発の遅れたわずかな県で知事ポストを獲得しているに過ぎない。

最後に西カリマンタン州では、スハルト時代の主要産業は中カリマンタンと同様に木材であった。しかし、莫大な利益を生み出す違法伐採ビジネスは、隣接するマレーシア・サラワク州の華人の手にあったため、中カリマンタンと異なり中小規模の実業家しか登場しなかった。これら実業家に加え、伐採現場やプランテーションで労働者をまとめるボスも台頭し、群雄割拠して首長の座を争うようになった。首長選挙では資金力に大差の無いこれらの候補が争うゆえに、暴力も政治的手段として使用されることになった。

以上の考察から、本書は次のような結論を導き出す。東・中・西カリマンタン州の地方政治・経済構造を比較すると、権力闘争において暴力が政治的手段として使用されるのは、十分な資金力がない政治エリート、すなわち天然資源の開発利権に直接・間接にアクセスできないエリートが、地方首長選挙に出馬した場合、もしくは僅差で敗北した場合に多い。資金力の不十分な候補が当選を

狙う場合、潤沢な資金がなくても利用可能で、かつ効果が期待できそうな暴力に頼るのだと考えられる。

以上が本書の内容である。カリマンタンの三つの州における天然資源の利権が、どのような構造のもとで誰に分配されているか、実に詳細に描かれており、丁寧に調べ上げた貴重な労作であると評価できる。

その上で、課題と考えられる点を四つ挙げたい。第一に、本書の問題設定はやや分かりにくい。序章の冒頭を読む限り、本書は、天然資源をめぐる利権争いが紛争に発展する場合とそうでない場合の違いを事例から明らかにしていくのだらうと予想させる。しかし、第1章に読み進むと、「本書は、非紛争地域における天然資源をめぐる政治的競争と暴力の関係性を探るもの」(p.13)と書かれており、問題設定が変化している。このため、紛争の話は出てくるのか出てこないのか、読者としては混乱する。さらに続きを読むことによって初めて、著者が選んだ三州の事例は、天然資源に直接関わる紛争は起きていないという意味において非紛争地域であるが、そのうち中・西カリマンタンでは、紛争には至らなくとも天然資源の利権をめぐる暴力が行使されている事例との位置づけであることが理解される。このような事例の意義づけは、序章の早い段階で明示されるとはるかに分かりやすい。

第二に、以上の位置づけを理解した上でもなお、中・西カリマンタンの事例の意義は掴みづらい。なぜなら、この両州の事例研究(第6章、第7章)において、具体的な暴力への言及が少なく、実際にどのような暴力が行使されたのか、その暴力は天然資源をめぐる暴力と言えるのか、明らかでないためである。例えば西カリマンタンの県知事選において、選挙のプロセスや結果に不満を抱く勢力が県議事堂で破壊行為を行ったことが述べられている。しかし、民主化後のインドネシアでは、少なくとも表面上は同種と見られる出来事が各地で起きているため、著者のこの事例が天然資源をめぐる暴力であり、天然資源の利権構造に起因するのだと主張するためには、より詳しい背景説明が必要となろう。

ただ、このような分かりづらさの要因は、暴力の事例の少なさというだけでなく、そもそも天然資源をめぐる暴力という、定義の難しい概念に著者が果敢に挑戦したがゆえとも言える。例えば油田や鉱山の実効的支配を争う武力衝突といった事例であれば、天然資源をめぐる暴力であることが自明である。しかし、本書が扱おうとしている「天然資源をめぐる政治的競争が引き起こす暴力」となると、外延を定めるのが難しい。カリマンタンのように天然資源が豊富な地域において、権力と利権は不可分であるから、天然資源の利権をめぐる暴力と、権力の座をめぐる暴力とを、明確に区別することは困難である。結果的に、天然資源の議論から出発しながら、より一般的な「選挙と暴力」といった、インドネシアの他の地域でも頻繁に見られる事象の話へと及びかねない。著者自身、中・西カリマンタンで起きた民族紛争を、権力をめぐる争いであって天然資源とは関係ないと判断しているが、それと同じ基準でこれら二州の政治に関わるあらゆる暴力事例を見たとき、「これは資源をめぐる暴力であって権力をめぐるものではない」と明快に分類できる暴力はそもそも存在するのか。極めて概念整理の難しい問題に、著者は挑んでいるのである。

第三に、本書の議論を支える論証の手順についてである。例として、第2章「カリマンタンの民族紛争」における議論の進め方を参照したい。この章では、西・中カリマンタンでそれぞれ1990年代後半と2000年代前半に起きた、地元民ダヤック人とマドゥラ人移民との紛争が分析される。その上で著者は、この二つの紛争がいずれも、ダヤック人エリートが権力（行政ポスト）の配分拡大を狙って暴力に訴えたものだと結論づける。この結論は、本書の中心テーマである「利権構造・政治構造と暴力の関係性」へと議論を繋ぐ土台となる部分であり、極めて重要である。だが、この結論に至る論拠は不十分との印象が否めない。

例えば、ダヤック人エリートがポスト獲得という明確な目的のもとに紛争を起こしたと推測しうる根拠は何であろうか。特に、西カリマンタンについては、第5章において、「1990年代半ば以降は、(中略)ダヤック人政治エリートにも地方首長

ポストが分配されるようになった」(p.179)とあるが、それではなぜ、ポストの分配が拡大し始めたタイミングで、取ってポストを要求する紛争を起こしたのか。また、西カリマンタンの紛争について、ダヤック人エリートが紛争を扇動した事実には触れられていないが、著者はどのような根拠から、紛争を利用したのはエリートであると結論づけたのか。さらに、行政ポストを要求する目的で、なぜ権力を持たないマドゥラ人を攻撃するかという根拠についても推測が目立つ。

加えて、両州で起きた民族紛争が天然資源とは関係がなかったとの第2章の結論は、「では、一体なぜ、西・中カリマンタン州では天然資源が暴力的紛争に結びつかなかったのか」(p.60)という、本書の核心へとつながる新たな問いを導く。だが、この論理の運びにも難がある。著者が取り上げた二つの特定の紛争が仮に天然資源とは無関係だったとしても、それをもって、これらの州では天然資源が暴力的紛争に結びつかないという一般論まで導くことはできないだろう。

論証のための資料についても疑問がある。著者は、*Kompasiana* というインターネットサイトの記事を新聞記事として引用している (pp.170, 171, 173) が、*Kompasiana* は登録さえすれば一般市民の誰でも記事を書いて投稿できる自由投稿サイトであり、記事の信憑性は投稿者個人の責任に委ねられている。やむを得ずこの種のサイトの情報を利用するとしても、新聞と同様に (*Kompasiana*, 24 January 2010) といった形で引用するのではなく、最低限、引用した記事の投稿者の氏名、所属など、どのような立場の人物が書いた記事かを明記する必要があるだろう。

最後に、著者の暴力に対する捉え方について、違和感を覚えた。著者によれば、東カリマンタン州では中央政界の再編が起きれば州政治においても再編が起ころうから、同州のエリートは選挙で負けたとしても中央での再編を待てばよく、「暴力的手段に訴えてでも地方首長の座を奪おうとしない」(p.141)という。他方で、中・西カリマンタンについては、「資金力に欠ける候補者が当選を狙う場合、潤沢な資金がなくても利用可能であり、かつ、効果が期待できそうな暴力に頼るのだと考

えられる」(p.207) といった記述もある。暴力のこのような論じ方からは、著者が次のような前提を持っているように思われる。すなわち、政治エリートは、権力闘争を生き抜く戦術として暴力が必要かつ有効であるか冷静に状況判断し、必要である場合にのみ暴力に訴える。そして暴力とは、必要なときに取り出して使い、不要なときはしまっておける、便利で安上がりな道具だ。このような前提である。上で述べたように、本書では紛争以外の暴力に関する記述が少ないため、著者が具体的にどのような暴力を念頭に置いているのか明らかではない。だが、誰にどのような暴力を行使させるにせよ、暴力とはそのように都合の良い道具であろうか。

評者が2005年にスマランやスラバヤなどの地方首長選を観察した限り、政治家がいわゆるごろつきと同盟を組んだ時点で、政治家がごろつきを利用するのと同様に、ごろつきも政治家を最大限利用しようと動き出す。選挙の際の協力の見返りとして利権を要求しつづけ、不満があればデモを起こす。彼らは、インフォーマルセクターの票の動員に威力を発するが、その動員能力は、いつ雇い主自身に刃向かう形で発揮されるか分からない。そもそも暴力が雇い主の道具に収まっている保証はない。暴力の担い手が、自身の利益のために動く可能性は常にある。このような側面を見るなら、暴力は、それがたとえ短期間の小規模なものであっても、必ずしも安上がりではないし、エリートが目的に合わせて管理・統制しながら利用できる手段とは言いがたい。

以上、いくつか残された課題はあるものの、本書は、三州の天然資源をめぐる利権構造と政治構造を非常に詳細に論じる一方で、それらの構造こそが暴力の有無を生み出すという大きな構図を描こうとしている点で、細部と全体構造との両方を包摂することを試みた価値ある労作である。評者自身も、暴力というテーマの難しさに常に頭を悩ませているが、著者の刺激的な議論は多くのことを考える機会を与えてくれた。インドネシア政治のみならず、天然資源問題に関心を持つ人々が一読すべき業績だと考える。

(今村祥子・大阪市立大学都市文化研究センター)

藏本龍介、『世俗を生きる出家者たち——上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌』法蔵館、2014、305p.

ブッダは悟りを開く道として、(必ずしも唯一の道ではないが) 世俗の生活を捨てて修行に専念する出家を説いた。この道は現在の上座仏教徒社会においても堅持され、多くの者が出家者の行動規範である律に従った修行生活を送っている。しかし、出家生活は世俗との関係を完全に断つものではない。出家生活を支える世俗社会からの布施をめぐっては、依存しつつも執着しないという中道的な立場が説かれる。但し、この道は「言うは易く行うは難し」である。現実の社会においては、出家者が安定的な出家生活のために世俗社会との結びつきを深くすると律の遵守が難しくなり、厳格な律遵守を目指すすと世俗社会との距離が大きくなり、十分な布施を得られないというジレンマがある。本書は、このようなジレンマに直面する上座仏教の出家者の「教義(律)と実践(出家生活)の複雑で動態的な関係」を、現代ミャンマーを事例として分析した研究である。

出家者による財の取り扱いの問題は、ともすると「宗教とカネ」といったジャーナリスティックなテーマと見られがちであるが、実は世俗とどのような関係を取り結ぶのかという出家者の宗教実践の根幹にかかわる問題である。本書は、出家者が財をどのようにして確保し・保有し・使用するのかという問題に正面から取り組んだ研究として高く評価できる。

本書の構成は、序論(第1章)、第1部(第2~4章)、第2部(第5~7章)、結論(第8章)となっている。序論と結論を除くと、前半の第1部で現代ミャンマーにおける最大の都市ヤンゴンという社会環境を生き抜く出家者の姿を描き、出家の理想と経済的現実の間で生じる諸問題を指摘する。第2部では、近年になって生まれてきた新しいタイプの僧院の事例を取り上げ、第1部で指摘した諸問題に対応しようとするミャンマーの出家者たちの「挑戦」を分析している。

第1章では、サンガ(出家者)と世俗社会(在家者)との関係についての先行研究を両者の相互

補完に注目する「共生モデル」、両者の間にある潜在的な矛盾を指摘する「振り子モデル」、近代化過程における両者の関係の変容を論じる「近代化モデル」として整理し、制度的仏教の周縁で地域ごとの社会的特徴を反映しながら活性化する仏教の姿に着目する「境域」研究の可能性を指摘している。このような先行研究の検討を踏まえて、本書では、世俗権力や公的なサンガ組織によって規定される制度的仏教の外に展開する出家者の律遵守、特に出家生活を維持するための経済倫理に関わる律遵守の実態の分析を試みるとする。

第2章では、ミャンマー・サンガの特徴を分析し、それは歴史的にみると世俗権力によって「上から」形成されてきたものであるが、制度的な組織化や管理は限定的で、現在においても、そのまともよりは表層的・形式的なものであるとしている。さらに、ミャンマーでは出家者の教学が重視されるため、若年の比丘が教学僧院を目指して地方から中央へ、「農村」から「都市」へと移動する「教学の巡礼」が顕著にみられ、これが制度的な組織化とは別次元でミャンマー・サンガのつながりと、教学的同質性をもたらしていると指摘している。

第3章では、世俗社会からの経済的支援（布施）の獲得の仕組みについてヤンゴンの僧院を事例として検討している。経済力のある都市に多くの出家者が引き寄せられる結果、在家者の布施をめぐって出家者・僧院が競合状況にあることを指摘し、托鉢や勧進活動、特定の在家者と「檀家」の関係を経るなど、布施を効率よく安定的に調達する出家者側の工夫が詳述されている。またヤンゴンのような都市部では、在家者に対して現世的なサービスを行う出家者よりも、熱心に教学や瞑想修行に専念する、あるいは在家者に対して瞑想や教学の指導をする「出家者らしい出家者」のほうが人気が高いこと、また地縁の関係が薄いとされる都市においても、地区レベルで活動する在家仏教徒組織が僧院経済を支えるセーフティネットとして機能していることが紹介されている。

第4章では、サンガ組織内、僧院内、出家者間での布施された財の所有・管理・使用の現状について記述する。律によって物財の所有や金銭の取り扱いが制限される出家者は、それぞれが在家の

管財人である「浄人」を置くことによって、金銭や財を所有し、使用することができる。このように僧院内の財の管理に関しても出家者は在家者に依存しているのであるが、出家者の多い都市の僧院ではすべての出家者が「浄人」を置けるわけではなく、直接金銭や物品を扱わざるを得ない律違反の状況にしばしば陥る。また出家者自らが携わる僧院の建物や土地の管理の場合にも、譲渡や相続をめぐって様々な問題が生じており、僧院における財の管理には、律が定める出家者の理想と経済的現実の狭間で葛藤が生じていることを指摘している。

第5章では、都市の僧院が直面する問題を克服する試みとして、出家生活の理想を求めて僧院運営の改革を行う運動を取り上げる。ヤンゴンの在家仏教徒組織 X 協会によって、ヤンゴン郊外に1986年に建設された律厳守と教理教育を実践する X 僧院と、その改革の精神に触発されて2002年に建設された Y 僧院という二つの僧院は、人里離れた森の中に建てられた「森の僧院」でありながら、都市在家者の間で理想的な僧院として高く評価され、多くの布施を集めることに成功している。著者は、このような「森の教学僧院」といえる新しいタイプの僧院は、在家仏教徒組織とシュエジン派という二つの近代仏教改革運動の結果として生じたものであると分析する。

第6章では、これらの「森の教学僧院」の律遵守の挑戦について、人類学の古典的テーマである「贈与論」との関係から考察を行っている。世俗の社会は贈与に対して返礼があるという贈与と交換の世界であるが、上座仏教の「出家」とはそのような贈与と交換を超えた世界にこそ真の救済があるとしている。しかし世俗社会から経済的支持を得る超俗的な出家の世界は、世俗社会からの取り込み（「土着化」）の危険にさらされているとも指摘する。この新しいタイプの僧院は、ヤンゴンの在家者からの経済的支持を得ながらも、世俗世界との距離を取り、在家者との個人的なかかわりを極力回避する行動をとる。著者は、このような社会逃避的な態度こそが世俗世界の真っ只中で〈世俗＝贈与と交換の世界〉の乗り越えを企図するものであると分析している。

第7章では、「森の教学僧院」を事例として、従来のミャンマー・サンガにはない新しい僧院運営の試みとそれが現在直面する問題について分析する。X僧院では、在家仏教徒組織X協会のメンバーからなる僧院管理委員会によって出家者の私有財産や僧院不動産の管理が行われている。「浄人システム」を制度化し僧院全体に適用する僧院管理委員会の存在によって、この僧院の出家者は財の確保・保有・使用に煩わされず、律遵守の理想の出家生活を送っている。しかし、僧院管理委員会という在家者による僧院（出家者組織）の管理は、上座仏教徒社会に広くみられる世俗権力・在家者による出家者の管理（の正当性）という問題を抱えることになるとしている。

結論の第8章では、本書の内容の総括を行い、その上で現代社会における出家者の行方について議論を展開している。スリランカやタイの事例研究において近代化過程の中で伝統的なサンガの権威が弱まり、出家者の役割が周縁化し、在家者の主体的な仏教実践の興隆がみられる「プロテスタント仏教」化が進むという議論に対して、ミャンマーでも近代化過程における仏教改革運動がおこるが、それは出家者の周縁化を進めるのではなく、出家者の存在感の強さが維持される方向で改革が進むとしている。

以上概要を紹介したが、本書は理論的枠組、論文の構成、データを基にした議論のいずれの点においても、熟考された良質の民族誌である。

以下、評者の観点からの評価を述べる。本書全体を通読して強く感じるのは、出家者の視点を通して現代のミャンマーにおける出家生活を真摯に記述しようという著者の姿勢である。上座仏教の人類学的研究は、經典的な仏教理解に敬意を払いつつも、研究対象地域の社会・歴史的状况のなかに埋め込まれた仏教の実態の研究を自らの仕事としてきた。例えば、村落社会における仏教実践、仏教と精霊信仰との関係、世俗権力と仏教サンガ（僧団）との関係、仏教的千年王国運動、近代仏教改革運動、カリスマ修行僧の崇拜、女性修行者と尼僧復興運動、近年の在家者瞑想運動などである。このような人類学的研究では「実践宗教」という掛け声のもと、出家者よりは一般の在家者の宗教

実践に関心を払い、あるいは出家者に注目する場合でも社会動態の中で生じる宗教運動のリーダーとしての役割に焦点を当てるが多かった。その一方で、出家者の日常の実践を取り上げ、出家生活における教義と実践の相克を詳細に分析する研究はほとんどなかった。それゆえ著者が、本書において現代ミャンマーの都市社会を生きる出家者の立場に寄り添い、これまで上座仏教の人類学的研究が等閑視してきた出家者の日常の「挑戦」を描くことができたことは大変すばらしいと思う。

しかし、その一方で本書が出家者の視点にこだわることの制約も感じた。本書では、世俗社会は出家者にとって依存しつつも執着すべきではない世界、取り込まれること（「土着化」すること）で出家生活の理想が危うくなるという潜在的危険を有する「他者」として描かれる。出家生活を支える「浄人」や僧院管理委員会でさえも僧院内の「内なる他者」として描かれる。出家者の視点から見ればそれで正しく、その「他者」や「内なる他者」との緊張関係の分析こそが本書の重要なテーマである。但し、律によって出家と在家が明確に区別されると同時に、出家と在家の循環が顕著なことも上座仏教徒社会の特徴であるとするならば（スリランカは例外である）、僧院に留まらなかった人々たちにとっての出家生活、あるいは在家者にとっての出家生活という「もう一つ」の日常を描くことができる可能性があるように思われる。但しこの点は、出家者から見た「出家生活の民族誌」である本書の価値を減じるものではなく、著者による今後の研究によって補完されるものと考えている。

最後に、本書の重要なトピックでもある僧院不動産の問題について、個人的に興味を持ったので感想を述べておく。出家者による動産（金銭や物財）の所有は評者が調査するタイでも広く認められており、過度な資産の保有はしばしば社会問題として取り上げられるが、僧院（寺院）を個人所有の不動産とすることはない。しかし、ミャンマーでは、僧院は（サンガ所有物となっている場合も多々あるが）個人・組織の不動産として登録することも可能であることを知り大変驚いた。本書で著者が記述するように、特定の比丘に対して布施された僧院用地や建物が比丘個人の所有物と

なりうること、そうして建てられた「自分の僧院」をヤンゴンで持つことが地方出身の比丘の一つのサクセスストーリーとなっていること、個人所有の僧院の所有権は他者に譲渡可能であることなどは、タイでは考えられない。そこで疑問なのであるが、このような世間一般とさほど変わらない僧院不動産の所有形態は、近代的土地（不動産）の所有・登記制度が整備された現代ミャンマーの大都市という特殊な状況下での事例であるのか、それともミャンマー・サンガの伝統として広く認められてきたものなのかが気になった。宗教空間としての僧院（寺院）の性格を検討する上で大変興味深い点である。

（村上忠良・大阪大学大学院言語文化研究科）

久保忠行『難民の人類学——タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』清水弘文堂書房, 2014, 356p.

評者が知る限り、本書は日本語で書かれたものとしては初めてのタイ・ビルマ国境のカレンニー難民についてのエスノグラフィーである。

ビルマのカヤー州を出身とし、タイ北西部のメーホンソーン県に居住するカレンニー難民をとりまく複雑な状況について、長期にわたる現地調査をもとに記述し、考察を試みている。これまで国家による難民管理や国際的な支援の論理から語られてきた当該社会の難民問題について、著者の専門である人類学の立場から当事者の視点に迫っている。これまでアフリカ中心であった難民研究のなかで、タイ・ビルマ国境の難民問題の事例を提供するのみにとどまらず、本書はタイ、ビルマ地域研究においても今後参照されるべき研究となるだろう。

著者の久保忠行氏は、2004年4月から2008年7月までのあいだに、のべ26カ月にわたるタイでの現地調査、そのうち17カ月を難民キャンプのあるメーホンソーン県に滞在し、NGOの支援活動に同行するかたちで5カ所の難民キャンプで調査をおこなった。さらに2009年と2011年にタイにおける追加調査、2012年と2013年には米国およびビルマでの現地調査もおこない、難民キャンプを

りまく状況だけでなく、その後の米国で第三国定住を選択した人びとや、民政移管後のビルマ帰還の可能性の検討についても視野に入れている。

本書は3部構成で全9章となっている。人類学の通過儀礼の分析概念をアナロジーとして、故郷を離れる移動の経験としての「分離」、難民キャンプでの生活という「過渡」、そして再び国家に包摂される「再統合」という三段階で、カレンニー難民の移動と定住のプロセスを示そうとしている。

「分離」のプロセスを描く「第一部 越境する難民」では、難民研究についての先行研究の整理と自らの視座を提示し（1章）、背景としての多民族国家ビルマとカレンニーをはじめとする少数民族との内戦の歴史の経緯、そして人びとの越境と難民キャンプ形成の歴史プロセスを描く（2章）。そして受け入れ国のタイにおける難民政策と難民キャンプの管理体制を詳述する（3章）。

「第二部 難民として生きる」では、「過渡」としての難民キャンプという生活世界を明らかにする。国家や支援機関の「ケアと管理」の視点ではとらえきれない難民キャンプの生活世界を、その居住空間や日常の営み、キャンプ内外の社会関係を描写することで可視化する（4章）。難民キャンプにおける伝統行事の復興を事例とするキャンプと故郷との連続性についての考察（5章）から、タイ、ビルマのいずれの国家にも属さないカレンニー難民の帰属意識の考察（6章）へと続く。

「再統合」のプロセスについての考察を試みる「第三部 国民国家のなかの難民」では、カレンニーを構成する民族集団のひとつであり「首長族」として知られるカヤンが、タイでの観光業をとおして定住化するプロセスにおけるカヤン女性のエージェンシーについての考察（7章）、難民キャンプから米国への第三国定住を選択した男性の事例による越境の民族誌の試み（8章）、そして最後にビルマの民政移管後の難民の帰還をめぐる状況についての考察で締めくくる（9章）。

ビルマ・タイ国境社会の研究に対する本書の功績として以下の3点を挙げたい。

第一に、タイ・ビルマ国境の難民キャンプ内部の日常を、参与観察によって可視化してみせた点である。その居住空間、季節労働者としての農園

での仕事、そのほか難民としてのさまざまな経験などのキャンプの日常を描写することで、難民キャンプが一時的な仮の居住空間ではなく、常態化した生活空間、ある種の「定住」であることを著者は指摘している（4章）。

第二に、カレンニー・ナショナリズムの生成の場としての難民キャンプについての分析（6章）である。難民キャンプは国家と国際的な支援による「ケアと管理」の空間であるだけでなく、少数民族にとってのアイデンティティ・ポリティクスの中にもあることを本書で明らかにしている。カレンニーの民族主義政党であるPNPP（Karen National Progressive Party）は、難民キャンプでの歴史教育や、カレンニー語とカレンニー文字の教育と普及に力を注いでいる。こうした活動が、難民にカレンニーへの帰属意識をある程度もたらすなかで、すべての難民がそのアイデンティティを受け入れるわけではなく、カレンニー・ナショナリズムとの一定の距離感があることも著者はとらえている。

第三に、難民のエージェンシーについてである。本書全体を通じて著者は、難民を単なる迫害を受けた少数民族としてではなく、むしろ難民という地位を積極的に利用し生きていこうとする人びととして捉え、その主体的行動に注目している。その最たる例が7章の「観光村」におけるカヤン女性に関する考察である。「人間動物園」と批判されることもある、真鍮のリングを首に巻く風習のあるカヤン女性の観光村について、カヤン女性自身の視点からみようと試みる。これにより、選択の余地なく見世物であることを強いられるカヤン女性という従来の見方ではなく、リングを外すという選択が基本的に女性自身に委ねられている状況を指摘した。このように難民であること、少数民族であることを利用し、ホスト社会で巧みに生きていこうとする人びとを描こうとしている。

本書では難民経験を「分離」「過渡」「再統合」という順序で構成している。この図式は、戦争、迫害、強制移住という暴力を始原とするカレンニーの移動のプロセス、難民キャンプにおいて第三国定住か本国帰還か定住の選択をせまられる人びとの現在を捉えるのに適している。ただし、こ

の分離、過渡、再統合という図式は、人びとの難民経験に「国家」という「起点」と「終点」があるという印象を与える難点がある。この図式そのものが、マルッキが言う「定住主義バイアス」[Malkki 1995]を前提としているという印象を与えてしまっている。

著者のカレンニーの難民経験の捉え方は、追われる経験、故地への思い、当事者である現実の難民の視点に、著者ができる限り寄り添った結果であろう。本書での著者の関心は、あくまでもいま生きている現在の人びとである。本書で扱われる難民経験は1980年代後半以降に起点がある。評者はいまだ非国家的空間に生きてきた人々の移動性というロマンに囚われているが、著者は現代世界に非国家空間は存在しないというリアリズムに立っているといえる。

しかし、難民キャンプという生活空間を「過渡」と表現することによって、その日常生活の観察から、それが一時的な滞在ではなくある種の定住だとする著者の重要な指摘を目立たなくしているのは残念だ。アイデンティティ・ポリティクスとカレンニー難民の関係を相対化する視点を本書は提供しているにもかかわらず、それでは彼らはどうあるべきなのかという著者の立場がはっきりとみえてこない。それをはっきりさせるためには、例えばトンチャイ・ウニツチャクン[2003]が示したような、シャムと英領ビルマとのあいだで国境が画定されてゆく19世紀後半からの歴史のなかで、難民問題を捉える試みも必要ではないだろうか。移動性の高いことが常態であった当該社会の山地民が、定住を余儀なくされるプロセスのひとつとして、難民キャンプを位置付けるという視点である。

その試みは、久保氏も訳者のひとりとして参加したジェームズ・C・スコットの『ゾミア』の山地民論への応答にもなるだろう。スコットは東南アジア大陸部の5カ国（ビルマ、タイ、カンボジア、ラオス、ヴェトナム）と中国の4省（雲南、貴州、広西、四川）を含む広大な山岳地域を「ゾミア（Zomia）」という新しい地域概念で呼び、ゾミア・スタディーズ（Zomia Studies）という新たな地域研究のあり方を示した[スコット 2013]。

言語、民族的にも多様で、約1億人の少数民族が暮らす山地社会をひとつの「地域」として捉えることの意義は、国民国家単位で世界を理解する一般的な知のあり方だけでなく、米国の政策科学としてはじまった地域研究が暗黙の前提としてきた地域概念も見直す契機になっている。

スコットは「ゾミア」に生きる人々を「これまでの2000年のあいだ、奴隷、徴兵、強制労働、伝染病、戦争といった平地での国家建設事業に伴う抑圧から逃れてきた逃亡者、避難民、マルーン共同体の人々」と定義し、その生業、社会組織、イデオロギー、そして口承文化さえも、国家から距離を置くために選ばれた戦略と主張した[同上書：ix-x]。これまで国民国家における少数民族として、貧困や人権侵害の被害者として、そして紛争から逃れてきた難民として理解されてきた山岳民族について、様々な背景を持つ人々から構成された、国家の支配から自由を求めて逃れてきた人々という新たな理解を提示している。

こうしたスコットのゾミア論と、ビルマ・タイ国境の難民問題を関連づけてみれば、当該地域の人びとの民族的アイデンティティよりも、その「生業のエートス」[松井 2011] に注目してみたい。松井はアフガニスタン東北部のパシュトゥーン遊牧民の長年の研究から、生業を生活物質の生産という限定的活動としてだけとらえるのではなく、生業自体が文化的な領分であることを示す「生業のエートス」という概念を提唱した[同上書]。タイ・ビルマ国境地域の物質的生態的条件から導かれる人びとの生業のあり方はいかなるものであったのか。スコットも同地域の焼畑耕作と栽培作物の選択について、移動性が容易な生業であるという観点から考察している。国家による統治、ビルマ軍の侵略と移動、難民キャンプでの定着によって失われた彼らの生活様式、知識とテクノロジーはいかなるものであったか。そしてタイ、ビルマ、そして第三国における定住が求められるなかで、彼らはどのような生活様式を再生するのか。

著者の当初の関心は、カヤンの観光村訪問からはじまり、難民キャンプの生活世界からはじまった。その後、難民キャンプを出て米国での定住を選択する人びと、また将来的なビルマへの帰還を

想定し、複数の国、地域におけるフィールドワークを継続している。こうしたカレンニー難民の現在をめぐるマルチ・サイト的なフィールドワークに、当該社会の地理・生態学的環境、生業と生活様式を視野に入れた、山地民の歴史と現在に関する研究者として、著者の今後に大いに期待したい。

(福武慎太郎・上智大学総合グローバル学部)

参考文献

- Malkki, Liisa H. 1995. Refugees and Exile: From “Refugee Studies” to the National Order of Things. *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.
- 松井 健. 2011. 『西南アジアの砂漠文化——生業のエートスから争乱の現在へ』京都：人文書院.
- スコット, ジェームズ・C. 2013. 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁(監訳). 東京：みすず書房. (原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.)
- トンチャイ・ウィニッチャクン. 2003. 『地図がくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄(訳). 東京：明石書店. (原著 Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press.)

富田江里子. 『フィリピンの小さな産院から』石風社, 2013, 288p.

フィールドワークのような読書体験

『フィリピンの小さな産院から』というシンプルで可愛らしいタイトルが付けられた本書には、フィリピンのお産をめぐる衝撃的な現実が綴られている。

助産師である著者は、家族で移り住んだフィリピン・サンバレス州・マンガハン再定住地に小さ

なマタニティ・クリニックを開くことになった。現地で暮らすうちに、お産を通じて多くの母子が死亡している話を耳にし、また友人達の死産を目の当たりにしたからだ。彼女のクリニックには妊産婦だけでなく他の多様な症状を持つ患者もやってくる。彼らのほとんどは貧困層の人びとであり、病院で治療が受けられなかったり、医師や看護師から差別されたりした経験を持つものも多い。著者は活動が続ける中で様々な境遇にある患者と関わり、価値観や習慣の違い、フィリピンの医療制度や社会の歪みと向き合ってきた。その経験を記したエッセイが2002年から『助産雑誌』に連載され、それらをまとめたのが本書である。4つのテーマで章が生まれ、それぞれ複数のエッセイが収録されている。

本書について正直に告白すると、評者は読み続けるのが辛くなることが何度もあった。それは、著者の描く一人一人の産婦の生き方を通して、読み手にダイレクトに彼女らの痛みが伝わるためだろう。加えて、分娩中の赤ちゃんの死、中絶、子どもの売り買い、育児放棄といったテーマがタブー視されることなく扱われている。また病状や処置に関する描写は生々しく、その場を想像するだけで血の気が引いていく思いがした。

そのように冒頭部ではショックを受けるばかりであったのが、少しずつ読み進めるうちに、著者が現地の人びとと共に喜んだり悲しんだり、彼らの行動に苛立ったり感心したりする過程を追体験しているような感覚を抱くようになった。その感情の移り変わりは、評者が長期フィールドワークを行った際に、遠く隔たったところにあった人びとや理解に苦しむ出来事との距離が徐々に近くなっていった経験と重なった。

本書はフィリピンの貧困層に寄り添ったお産介助の実践報告でありながら、現地社会の「リアリティ」の重みと鮮やかさを伝えるエスノグラフィーとして読むこともできる。フィリピン社会の暖かさとしき辛さ、人間の生命力と矛盾が詰まった濃厚な一冊である。本書を手にとった方がそれぞれ素敵な読書体験をされることを願って、以下いくつかの論点に沿って本書の内容と魅力について紹介する。

「光と闇」が凝縮された現場

著者曰く「ここは人と人の距離がとても近い」(p.2)。当然お産も、家族・親族から近隣の友人、中にはたまたま居合わせた他人まで、たくさんの人に囲まれお節介を焼かれながら進んでいく。本書には自宅出産の事例がいくつも登場するが、ドタバタの様子が目に浮かんで思わず微笑んでしまった文章を引用してみたい。

到着するともうすぐ生まれる状態だった。皆何かそわそわ落ち着かない。「便を捨てるビニールある？」と聞くと、家のなかにいる女性陣全てが一斉にビニールを探す。エンジェルの背中を支えていた母親まで、ビニールを探しに行くので私は止めるのに必死だった。その後は、次々にビニール袋が届き私は苦笑するしかなかった。(中略) こういうお産は幸せだ。たとえ役に立たない行動でも、皆が産婦と赤ちゃんのために何かしたいと考えるエネルギーはあたたかく循環する。自宅出産が順調に進むのは、こうした精神的リラクセスが大きいのだと思う。(pp.64-65)

管理出産が当たり前となった日本では、病院で医師や助産師の処置を受けなければ安全なお産ができないと思いがちである。一方現地では、産婦が最もリラックスできる環境で「自分の力で生む」お産が実践されている(実践せざるを得ない状況でもある)。彼らにとってお産は、人との繋がりや生命力がこの上なく発揮される場である。著者は、多くの母子が特別な支援を受けずに家庭出産し、子どもが元気に育っていくのを経験し、そこに親子の愛情と生きる力が自然に育まれるお産のあり方を見出している。

多くの新たな命は、このように愛情と希望をもって迎えられる。しかし、妊娠と出産は時に、身体的・精神的・経済的負担となって産婦に重く押し掛かる。本書には、貧困を中心とした悪循環の中で辛い経験を強いられる人びとの姿も描かれている。例えば、著者のクリニックの周りで売春をして生きる女性の中には、何度も妊娠・出産し、

そのたびに里子に出さざるを得ない人達がいる。場末になるほど避妊を求めると客が見つからない、子どもを連れては仕事ができないといった事情があるためだ。ある24歳の産婦は4回出産したが、子ども達はみな彼女の元にはいない。

お産をめぐる様々な記述を通して、現地社会における富裕層と貧困層、女性と男性、大人と子どもといった力関係と不平等が浮き彫りになっていく。本書は、家族と性に纏わる最もセンシティブな領域に切り込むことによって、社会と人間の「光と闇」が凝縮された現場を臨場感をもって描いている。

近代医療と出産

——「あるべきお産」をめぐる

日本における病院出産は、高度経済成長と共に増加してきた。お産を病院で管理することについての評価は、出産を女性に備わった生理的プロセスと見るか、医学的介入を必要とするプロセスと見るかによって異なっている。

お産を女性の自然の生理とする立場からは、異常の無い/少ないお産まで医療の対象として扱われることによって産婦と児へ余計な負担を与え、「人工難産」や産後うつを生み出しているとする批判が為されている[松岡 2014: 106-107, 133-140]。一方、医療者の側は low risk の場合に限って助産師主導の妊娠・分娩管理を認める判断が趨勢である。日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会のガイドラインでは「異常発見のための検査」と「発見された異常に対する適切な対応」が細かに記され、最後まで正常と判断された妊婦のみが医師の介入のない出産を全うすることができる[日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会 2014: 259-265]。現代の日本では「お産は安全」という意識が根強いいため、出産においてひとたび「予期せぬ異常」が起きれば医療者や介助者の責任が問われやすい。そうした社会の風潮において、管理の範囲は拡大し厳格化する傾向にあるといえるだろう。

フィリピン、特に本書のクリニックがある地域では、多くのお産が医療の外部で行われるという現状がある。その背景として、まず第一にお金がないと医療にアクセスできない。支払いが数百円

足りないために病院に居ながらにして治療を受けられず命を落とすこともある。さらに、医師や看護師から差別的な対応や乱暴な処置を受けた経験、不満や症状を聞き入れてもらえないことに起因する不信感は、貧しい人びとを病院から遠ざける。

そのため近代医療が行き渡らない間隙において、家庭出産や産婆・伝統的マッサージ師によるお産介助が日常的に行われてきた。こうした状況は、リスクのある出産が必ずしも病院で処置を受けられない問題がある一方、全てのお産を医療の領域に押し込むことによる弊害から自由であるともいえる。

ところで、本書著者の立場は一貫して「自然なお産派」である。彼女は自身の出産についても自宅で生むことを強く希望していた。しかし、著者の赤ちゃんは過産期寸前になっても生まれず、母体には様々な異変が起こることになる。最終的な選択と出産の結末については、詳しくは本書を読んでいただくとして、一連の記事から評者が感じたことは、少なくとも家庭か病院かという二分法で「あるべきお産」を語ることはできないということだ。身体の状態、胎児と出産に対する感覚、住む場所や経済的余裕等の物理的環境は、その時その人固有のものである。そして、お産の結果は誰かと一緒に背負うことはできない。それが、「子どもの命への責任、自分の命の責任は産婦である自分自身にある」(p. 201)と著者の言う意味だと理解した。「あるべきお産」は一般化できず、しかも自分の身に全て引き受ける経験であるからこそ、産婦が心身の状態を共有する場や関係性、環境が整わない時に誰かがすぐに手を貸してくれる状況が必要だ。そうでなければ、たとえ物理的に「贅沢なお産」が可能になったとしても、お産がどんどん孤独になっていくように思える。

「生」を基点に世界を繋げる

最後に、本書が開くエスノグラフィーの可能性について考えてみたい。収録されたエッセイは基本的に一話完結型であり、本書全体を通した「既存研究への批判」「問いに対する答え」といったストーリーは存在しない。そのため読者によっては

散漫な印象を抱いてしまうかもしれない。

では、本書の何に心を打たれるのかと問われれば、評者は「生の葛藤」と答えるだろう。本書には人びとの矛盾する行動や複雑な感情がそのまま描かれている。それは一貫した価値観や行動規範によって説明できない雑多な営みである。文化人類学的な、あるいは地域研究のフィールドワーク経験者の多くは、そうした営みが日常の大部分を占めることを実感しているのではないだろうか。それにもかかわらず、一旦「書く」作業になると説明できない要素はそぎ落とさざるを得ない。だが、ディシプリンに沿った情報の取捨選択と表現が、人びとの生活実態からかけ離れていくのだとしたら、それは何のために誰に対して書いているのだろうかという疑問が湧いてくる。

エスノグラフィーについて文化人類学が展開してきた議論・自己批判の多くは、書く側と書かれる側の非対称性に力点を置いてきた。その応答として例えば清水は、人類学者がホームとフィールドという2つの世界を生きる困難な経験や調査対象との生身の関係を「他者表象」に響かせることによって、両者の固定的構造を切り崩す可能性を示唆している [清水 2003: 67-108]。

一方本書は、テキストとしてのエスノグラフィーのもう1つの極である、読む側と読まれる側の相互作用について、研究者と当事者のみならず多様な読み手を射程に入れた表現の可能性を示している。本書に描かれる「リアリティ」は、読み手である私達の生きる現実と現地の人びとの現実を繋げる力を持っている。何故なら命という切実な問題をめぐる葛藤は、置かれた状況は違っても、どこにでもあるからだ。そのチャンネルを通して「私達」と「彼／彼女ら」の現実が重なる。そのため読み手は2つの世界の間に境界線を引く

ことができず、自身の生のあり方について、違う角度から見直すことを余儀なくされる。

他者の生と繋がり自分の立ち居居が覆される経験は、心地良いとは限らない。他者の生を受け入れることは、自己を解体し更新し続ける不安や痛みを伴うからだ。しかしその作業を怠れば「私達」と「彼ら」の間の境界線が揺らぐことはない。テキストの受け取り手に対してそうした揺らぎの発信源となることは、文化人類学や地域研究といった異文化を対象とする研究の重要な役割の1つといえるのではないだろうか。

近年、ヘイトスピーチに代表されるように、人びとをカテゴライズし、限定された想像力のうちに「彼ら」のイメージを固定化しようとする言説を頻繁に目にする。他者の生と繋がることによって一人一人に経験される揺らぎは、それらの言説に対する静かなしかし確かなカウンターとして力を持ち得る。本書は「他者」について書くことの困難さを改めて突きつけると共に、そのオルタナティブな可能性を示している。

(吉澤あすな)

参考文献

- 公益社団法人日本産科婦人科学会；公益社団法人日本産婦人科医会. 2014. 『産婦人科診療ガイドライン——産科編 2014』 http://www.jsog.or.jp/activity/pdf/gl_sanka_2014.pdf (最終アクセス：2015年4月28日).
- 松岡悦子. 2014. 『妊娠と出産の人類学——リプロダクションを問直す』 京都：世界思想社.
- 清水 展. 2003. 『噴火のこだま——ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』 福岡：九州大学出版会.